

二重否定表現「ぬにしもあらず」と「ずしもあらじ」

源氏物語を資料として

西 田 隆 政

1 はじめに

さきに、西田（2005）において、源氏物語の二重否定表現の一例として「ぬことなし」をとりあげた。本稿では、それにつづいて、「ぬにしもあらず」と、「ずしもあらじ」の例をみていくことにしたい。

2 源氏物語の「ぬにしもあらず」

源氏物語中には8例の「ぬにしもあらず」の例をみることができる¹⁾。つぎの[1]から[8]までである。

[1] はかばかしうものたまはせやらず、むせかへらせたまひつつ、かつは、人も心よはくみたてまつらむと、おぼしつつまぬにしもあらぬ御けしきの心ぐるしさに、うけたまはりもはてぬやうにてなむまかではべりぬる」とて、御文たてまつる。²⁾ （「桐壺」12 - 12）

[2]うらもなくまちきこえ顔なるかたつかた人を、あはれとおぼさぬにしもあらねど、つれなくてききみたらむことのはづかしければ、まづこなたの心みはててとおぼすほどに、伊予介のぼりぬ。

（「夕顔」108 - 1）

[3]伊予介といひしは、故院かくれさせたまひてまたの年、常陸になりてくだりしかば、かの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居もはるかにききて、人しれずおもひやりきこえぬにしもあらざりしかど、つたへきこゆべきよすがだになくて、筑波嶺の山をふきこす風もうきたるここちして、いささかのつたへだになくて、年月かさなりにけり。

（「関屋」547 - 3）

[4]いみじう心もとなければ、「これあけさせたまへ。小侍従やさぶらふ」とのたまへど、音もせず。御乳母子なりけり。ひとりごとをきき

たまひけるもはづかしうて、あいなく御顔もひきいれたまへど、あはれはしらぬにしもあらぬぞにくきや。乳母たちなどちかくふして、うちみじろくもくるしければ、かたみに音もせず。（「少女」687 - 13）

[5]「今日か明日かとおぼえはべりつつ、さすがにほどへぬるを、うちたゆみて、ふかき本意のはしてにもとげずなりなむこととおもひおこしてなむ。かくても、のこりのよはひなくはおこなひの心ざしもかなふまじけれど、まずかりにてものどめおきて、念仏をだにとおもひはべる。はかばかしからぬ身にて、世にながらふまじけれど、ただ、この心ざしにひきとどめられたると、おもうたまへしられぬにしもあらぬを、いままでつとめなきおこたりをだに、やすからずなむ」とて、おぼしおきてたるさまなど（「若菜上」1047 - 1）

[6]大将の君は、この姫宮の御ことをおもひおよばぬにしもあらざりしかば、目にちかくおはしますを、いとただにもおぼえず、おほかたの御かしづきにつけて、こなたにはさりぬべきをりをりにまゐりなれ、おのづから御けはひありさまもみききたまふに、

（「若菜上」1108 - 11）

[7]「右の大臣の北の方の、とりたてたる後見もなく、をさなくよりものはかなき世にさすらふるやうにて、おひいでたまひけれど、かどかどしく労ありて、われもおほかたには親めきしかど、にくき心のそはぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなしてすぐし、この大臣の、さる無心の女房に心あはせていりきたりけむにも、けざやかにもてはなれたるさまを人にもみえしられ、（「若菜下」1203 - 7）

[8]正身は、たまさかに対面したまふとき、かぎりなくふかきことをたのめちぎりたまひつれば、さりともこよなうはおぼしかはらじと、おぼつかなもわりなきさはりこそはものしたまふらめと、心のうちにおもひなぐさめたまふかたあり。ほどへにけるがおもひいれたたまはぬにしもあらぬに、なかなかにてうちすぎたまひぬるを、つらくもくちをしくもおもほゆるに、いとどものあはれなり。（「総角」1641 - 3）

さらに、類例として、否定の助動詞がジとなる「ぬにしもあらじ」が[9]の1例、前項の否定助動詞が非存在をしめす形容詞ナシとなる「～なきにしもあらず」が[10]の1例である。なお、[10]については、「つつまぬにしもあらず」とほぼおなじ意味で使用されていると判断して、類例としてあつかう。

[9]「なほかうおぼししらぬ御ありさまこそ、かへりては、あさう御心のほどしらるれ、かう世づかぬまでしれじれしきうしろやすさなども、たぐひあらじとおぼえはべるを、何ごともかやすきほどの人こそ、かかるをば痴れ者などうちわらひて、つれなき心もつかふなれ。あまりこよなくおぼしおとしたるに、えなむしづめはつまじきこちしはべる。世の中をむげにおぼししらぬにしもあらじを」と、よろづにきこえせめられたまひて、いかがはいふべきとわびしうおぼしめぐらす。

（「夕霧」1318 - 5）

[10]「人しりたることよりも、かやうなるはあはれもそふこととなむ、昔人もいひける。あひおもひたまへよ。つつむことなきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくなむありける。また、さるべき人びともゆるされじかしと、かねて胸いたくなむ。わすれでまちたまへよ」など、なほなほしくかたらひたまふ。

（「空蟬」92 - 3）

「ぬにしもあらず」は使用例そのものが非常にすくなく、源氏物語中では、[1][5][7][9][10]のように、会話文等で話し手がみずからの心情をのべる例が主要なものである。そして、地の文での使用例も、[2][3][4][6][8]とあるが、語り手が登場人物の心情をおもんばかって表現する例であり、地の文として物語の叙述をすすめる部分に使用されることはなく、会話文等での使用例に通じるものである。動詞も「おもふ」等の思考をしめすもののみで、この点からも、二重否定の表現として、使用範囲の限定されるものであったとかがえられる。

また、文中での使用部分についても、基本的には従属節、それも逆接をしめす接続助詞ドモやヲが接続する例がおおい。[2][3]がドモ、[5][7][9]がヲである。登場人物の心情が逆接の形式で、「～とおもわないでもないが」のように、いいきらず留保してしめされていることになる。

「ぬにしもあらず」は、否定の助動詞ズの連体形又には、断定の助動詞とされるナリの連用形二に副助詞シと係助詞モが接続して、それをさらにアラズと存在を否定するものである。この点では、西田（2005）でとりあげた、「ぬこともなし」が否定的事態の非存在をしめすことで、結果として肯定表現となっているのと、ほぼ同様であるとみることができる。

3 「にしもあらず」の使用例

二重否定表現「ぬにしもあらず」に対して、前項の否定の助動詞がない「にしもあらず」の例もみることができる。つぎの[11]から[17]の7例である。

[11]大臣は、あながちにおぼしいらるるにしもあらねど、つれなき御けしきのうれたきに、まけてやみなむもくちをしく、げに、はた、人の御ありさま、世のおぼえことにあらまほしく、ものをふかくおぼししり、世の人のとあるかかるけぢめもききつめたまひて、昔よりもあまたへまさりておぼさるれば、
(「朝顔」652 - 8)

[12]右近をめしいでて、「かやうにおとづれきこえむ人をば、人えりしていらへなどはせさせよ。すきずきしうあざれがましき今様の人の、便ないことしいでなどする、をのこのとがにしもあらぬことなり。
(「胡蝶」790 - 3)

[13]春宮は、かかる御なやみにそへて、世をそむかせたまふべき御心づかひになむと、きかせたまひてわたらせたまへり。母女御もそひきこえさせたまひてまゐりたまへり。すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御宿世のかぎりなくめでたければ、年ごろの御物語こまやかにきこえかはしたまひけり。

(「若菜上」1026 - 9)

[14][15]わが御北の方も、あはれとおぼすかたこそふかけれ、いふかひあり、すぐれたるらうらうじさなどものしたまはぬ人なり。おだしきものに、いまはと目なるるに心ゆるびて、なほかくさまざまにつどひたまへるありさまどものとりどりにをかしげを、心ひとつにおもひはなれがたきを、まして、この宮は、人の御ほどをおもふにも、かぎりなく心ことなる御ほどに、とりわきたる御けしきにしもあらず、人目のかざりばかりにこそとみたてまつりしる。わざとおほけなき心にしもあらねど、みたてたまつるをりありなむやとゆかしくおもひきこえたまひけり。
(「若菜上」1110 - 6・7)

[16]さるは、おはせし世には、なかなか、かかるたぐひの人しも、たづねたまふべきにしもあらずかし。わがあやまちにてうしなひつるもいとほし、なぐさめむとおぼすよりなむ、人のそしりねむごろにたづねじとおぼしける。
(「蜻蛉」1961 - 2)

[17] 弁のおもととてなれたるおとな、「そもむつましくおもひきこゆべきゆゑなき人の、はぢきこえはべらぬにや。ものはさこそは、

なかなかはべるめれ。かならずそのゆゑたづねて、うちとけ御覽ぜら
るるにしもはべらねど、かばかりおもなくつくりそめてける身におは
さざらむも、かたはらいたくてなむ」ときこゆれば、

(「蜻蛉」1978 - 4)

「にしもあらず」は、動詞に接続するものが[11][16][17]の3例、名詞に
接続するものが[12][13][14][15]の4例である。動詞の使用例は思考をしめ
すものは[11]のみであるが、逆接の従属節に使用されるものが[11][17]で、
[16]も終助詞カシが接続して明確にいいきる表現ではない。この点は「ぬ
にしもあらず」と同様の傾向である。名詞の使用例でも文末の例はなく、
従属節での使用のみである。また、[13][15]は逆接での使用例である。

以上の点からすると、「にしもあらず」は、使用範囲としては、「ぬにし
もあらず」に通じるところがあるものの、かならずしも一致するものでは
ない。「にしもあらず」のほうが、使用範囲がひろいとかんがえられる。

しかし、「にしもあらず」はあっても、その肯定表現の「にしもあり」の
例はなく、後項の否定の助動詞がない「ぬにしもあり」「ぬしもあり」の例
も存在しない。また、二重否定表現でも「ぬしもあらず」と二を介在しな
い例もない。これらの点も、「ぬにしもあらず」を検討するうえで、注意さ
れるべき点である。

4 連用形接続のシモと連体形接続のシモ

「ぬにしもあらず」と類似の二重否定表現に、助動詞ナリの連用形二が
介在せず、かつ末尾の助動詞がジとなる、[18][19]の「ずしもあらじ」が2
例あり、二重否定表現ではないものの、[20]の「ずしもあらむ」が1例あ
る。ただし、この例は、「などかは」との共起で反語として使用されている
とかんがえられ、否定的に事態をとらえている点で[18][19]に通じるもの
である。

[18]「いでや。われにても、またしのびがたう、ものおもはしきをり
をりありし御心さまの、おもひいでらるるふしづしなくやは」とほほ
ゑみてきこえたまへば、あな心うとおぼいて、「うたてもおぼしよるか
な。いとみしらずしもあらじ」とて、わづらはしければ、のたまひさ
して、

(「胡蝶」795 - 3)

[19]単衣の御衣の袖に、古代のことなれど、 / 小夜衣きてなれきとは

いはずともかごとばかりはかけずしもあらじ / と、おどしきこえたまへり。
(「総角」1624 - 4)

[20]「すべて男も女も、わろ者は、わづかにしれるかたのことをのこりなくみせつくさむとおもへるこそ、いとほしけれ。三史五経、みちみちしきかたをあきらかにさとりあかさむこそ愛敬なからめ、などかは女といはむからに、世にあることのおほやけわたくしにつけて、むげにしらずいたらずしもあらむ。
(「帚木」61 - 11)

これらはいずれも文末の例であり、「ぬにしもあらず」が従属節で使われるのに対して、使用傾向が相違する。おなじ二重否定表現であっても、連体形にシモが接続するものと連用形にシモが接続するものとは、性質のことになったものであると予想される。

その点を検討するために、用言での連体形と連用形にシモが接続する例を比較することで、なんらかのちがいがあるのかどうかを、調査する。

まず、動詞の例では、連用形にシモが接続する例が5例で、「しもせじ」が4例、「しもせず」が1例と動詞の否定表現と共起する。そして、それらの5例はすべて文末での使用例である。また、5例ともに和歌のそれも歌の末尾での例である。[21]が「しもせじ」、[22]が「しもせず」の例である。

[21] / 人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜の闇 / うちなげきてたてば、うちの人のかへし / をりからやあはれもしらむ梅の花ただ香ばかりにうつりしもせじ /
(「竹河」1473 - 8)

[22] かの大極殿の御輿よせたところのかうがうしきに / 身こそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせず / とのみあり。
(「絵合」568 - 3)

動詞の連用形にシモが接続する例は、和歌における特殊な使用例という可能性がたかい。推量系の助動詞と共起している点からも、「ずしもあらじ」の使用例に通じる使用例であるとかんがえられる。

動詞の連体形にシモが接続する例は4例で、「おぼすしも」が2例、「ささめくしも」が1例、「たのみきこえさする」が1例である。動詞にさらに助動詞が接続する例では、タルシモが3例、ルシモ(完了リ)が15例である。[23]が「おぼすしも」の例、[24]がタルシモの例、[25]がルシモの例である。

[23] いにしへよりも、ものふかくはづかしげさまりて、かくもてはな

れたることとおぼすしも、みはなちがたくおぼさるれど、はかなきことをのたまひかくべくもあらず、おほかたの昔今の物語をしたまひてかばかりのいふかひだにあれかしと、あなたをみやりたまふ。

(「初音」773 - 10)

[24]女君も、かひなきものにおぼしすてつる命、うれしうおぼさるらむかし。いとうつくしげにねびととのほりて、御ものおもひのほどにところせかりし御ぐしのすこしへがれたるしもいみじうめでたきを、いまはかくてみるべきぞかしと御心おちゐるにつけては、またかのあかずわかれし人のおもへりしさま心くるしうおぼしやる。

(「明石」475 - 10)

[25]これは、いますこしこまやかなる夏の御直衣に、紅のつややかなるひきかさねてやつれたまへるしも、みてもあかぬこちぞする。

(「葵」310 - 4)

動詞の連体形にシモが接続する例は、連用形にシモが接続する例はことなり、肯定表現と共起する例しかみられない。また、タルシモ・ルシモの例は、いずれも状態性の表現で、人の様子を描写する例に限定されるという特徴がある。

形容詞の連用形にシモが接続する例は19例中17例が否定表現と共起する。「あさし」が2例、「いそがし」が1例、「いたし」が1例、「くはし」が1例、「心つよし」が2例、「心やすし」が2例、「ふかし」が5例、「めでたし」が1例、「やむごとなし」が1例、「よし」が1例である。のこりの2例は、反語となる「ふかし」の1例、と肯定表現と共起する「うらなし」が1例である。[26]が否定表現と共起の例、[27]が反語の例である。

[26]女も、にげなき御年のほどをはづかしうおぼして、心とけたまはぬけしきなれば、それにつつまたるさまにもてなして、院にきこめしいれ、世の中の人もしらぬなくなりたるを、ふかうしもあらぬ御心のほどを、いみじうおぼしなげきけり。

(「葵」284 - 10)

[27] 対の御方ばかりこそは、「あはれ」などのたまへど、ふかくもみなれたまはざりけるうちつけのむつびなれば、いとふかくしもいかでかはあらむ、また、おぼすままに、こひしや、いみじやなどのたまはむにはかたはらいたければ、かしこにありし侍従をぞ、例のむかへさせたまひける。

(「蜻蛉」1974 - 7)

形容詞の連用形にシモが接続する例は、反語の使用例もふくめて、ほぼ

否定表現専用というべきもので、形容詞の否定表現の一形式ともかんがえられる。また、「あさくしもおもひなされねど」(「帚木」76 - 1)「心つようしもあらずならひたりしを」(「明石」464 - 1)「心やすくしもあらずらむものから」(「宿木」1740 - 12)「心やすくしも対面したまはぬを」(「東屋」1845 - 14)のように、逆接の従属節での使用例がみられる。この点は、「ぬにしもあらず」に通じる傾向といえる。

形容詞の連体形にシモが接続する例は2例で、いずれも肯定表現と共起する例である。「～である一方～」のような相反する評価を並列する例とみることができる。

[28]たぐひなかりし御けしきこそ。つらきしもわすれがたう。いかに人みたてまつりけむ。ノうちとけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすぼほるらむノをさなくこそものしたまひけれ」と、

(「胡蝶」799 - 8)

[29]よろづのこと、帝の御心ひとつなるやうにおぼしいそげば、御後見なきしもぞ、なかなかめでたげにみえける。(「宿木」1769 - 13)

形容動詞の連用形にシモが接続する例は17例中15例が否定表現と共起する。「あながちに」「あらはに」「おほかたに」「おもふやうに」「かやうに」「心ひとつに」「こまかに」「したたかに」「すなほに」「にはかに」「ひたぶるに」「まほに」が各1例で、「ただに」が3例である。のこりの2例も反語となる「あながちに」「ひたぶるに」が各1例である。[30]が否定表現の「すなほに」の例、[31]が反語の「ひたぶるに」の例である。

[30]「つねに、をりをりかさねて心まどはしたまひし世のむくいなどを、仏にかしこまりきこゆるこそくるしけれ。おぼししるや。かくいとすなほにしもあらぬものとおもひあはせたまふこともあらじやはとなむおもふ」とのたまふ。(「初音」773 - 6)

[31]父宮ききたまひて、「今は、しかかけはなれてもていでたまふらむに、さら心つよくものしたまふ、いとおもなう人わらへなることなり。

おのがあらむ世のかぎり、ひたぶるにしも、などかしたがひくづほれたまはむ」ときこえたまひて、(「真木柱」949 - 9)

形容動詞の連用形にシモの接続する例は、形容詞の連用形にシモが接続する例とおなじく、否定表現の専用とみることができる。また、[29]のように逆接の従属節での例がみられる。そのほかにも、「にはかにしもおもひたたざりしを」(「竹河」1488 - 1)「ひたぶるにしもたえこもらぬわざな

めるを」(「早蕨」1688 - 7)があり、この点は「ぬにしもあらず」に通じるものである。

形容動詞の連体形にシモが接続する例は、5 例でいずれも肯定表現と共起する。「おぼえなきさまなる」「ことなる」「つれなしがほなる」「やはらかなる」が各 1 例、助動詞ベシの接続する「おとしめざまなるべき」が 1 例である。[32]が「やはらかなる」の例、[33]が「おとしめざまなるべき」の例である。

[32]いかにぞ、をこがましきこともこそとおぼすに、いとつつましけれど、みちびくままに母屋の几帳のかたびらひきあげて、いとやをら
いりたまふとすれど、みなしづまりたる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしもいとしるかりけり。 (「空蟬」90 - 3)

[33]やむごとなきよりも、典侍腹の六の君とか、いとすぐれてをかしげに、心ばへなどもたらひておひいでたまふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心くるしうおぼして、

(「匂宮」1439 - 11)

形容動詞の連体形にシモの接続する例は、肯定表現とのみ共起し、形容詞の連体形にシモの接続する例と同様の傾向である。否定表現専用である、連用形にシモの接続する例とは、まったくことなったものとみることができる。

以上みてきたところからすると、動詞・形容詞・形容動詞ともに、連用形にシモが接続する例は否定表現と共起し、連体形にシモが接続する例は肯定表現と共起するというのが、基本的な傾向であることがあきらかとなった。このことは、助動詞ズの連用形ズに接続する「ずしもあらず」が否定表現専用であることと、同様の傾向である。とくに、動詞の連用形にシモが接続する例とは、非常によく似た使用傾向をしめしている。

それに対して、否定の助動詞ズの連体形又に接続する「ぬにしもあらず」と用言の連体形や体言に接続する「にしもあらず」では、「ぬにしもあり」や「ぬしもあり」のような、肯定表現と共起する例がなく、他の用言の例とはことなったこととなったものである。

しかし、ここで注意されるのは、[30][31]のような形容動詞の連用形にシモが接続する例である。これらも語形としては、「にしもあらず」と同様のものである。さらに、意味の面からしても、状態性の表現という点ではあい通じるものがある。

たとえば、「にしもあらず」の[12][13]は、それぞれ「すぐれたる御おぼえにしあらざりしかど」と「とりわきたる御けしきにしもあらず」のように、特定の状態であることを留保しつつも否定する例である。これは、[30]の「かくいとすなほにしもあらぬものを」と状態の否定という点でおなじである。

一方、「ぬにしもあらず」も、思考動詞の例ゆえになんらかの否定的な思考状態にあることをしめすものである。たとえば、[2]の「あはれとおぼさぬにしもあらねど」では、「あはれ」とは思わないという状態をさらに留保しつつ否定するわけである。

いわゆる断定の助動詞ナリの連用形二が接続することで、その直前の事態を状態化してとらえて、それをさらに否定する。その点では、形容動詞の連用形にシモの接続して否定表現が共起する例となんらかわるところはない。さらに、形容動詞の連用形にシモが接続する例には、逆接の接続助詞と共起する例がある。この点も、「ぬにしもあらず」に通じるところである。

以上のようにかんがえると、二重否定表現の「ぬにしもあらず」と「にしもあらず」が形容動詞の連用形にシモが接続する例と共通する点があり、二重否定表現の「ずしもあらず」が動詞の連用形にシモが接続する例と共通する点があるということになる。ただし、これらは使用例自体がすくなく、特定のものに限定されている。しかし、基本的な使用傾向については、類似の使用例が存在する。用言にシモの接続する例の使用範囲のひとつと理解することが可能なのである。

5 まとめ

二重否定表現「ぬにしもあらず」と「ずしもあらず」は、源氏物語中でもそれぞれ10例と2例と非常に使用例のすくないものである。その点は、さきに検討した、使用例が21例である「ぬことなし」と同様である。

しかし、まったくの特殊な使用例というわけではなく、それぞれ、用言の連用形にシモが接続して否定表現と共起する例に通じるものと理解することができる。ただ、シモを介して留保的に否定するような表現が、思考をしめす動詞以外には使用されないゆえに、使用例がすくなかったとかんがえられるのである。

注

- 1) 源氏物語の調査は、上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・上田裕一共編『源氏物語語彙用例総索引付属語編』1～5(勉誠社 1994)による。
- 2) 源氏物語の引用は、池田亀鑑『源氏物語大成校異編』1～3(中央公論社 1953)により、ページ数行数をしめした。引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、濁点をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。なお、引用中の下線は稿者によるものである。

参考文献

- 野村 剛 2001 「し」(副助詞)「しも」係助詞(山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院)
- 西田隆政 2005 「二重否定表現「ぬことなし」をめぐって 源氏物語を資料として」(『甲南女子大学研究紀要』文学・文化編 41)